

渡辺隆司氏 株式会社ヤスハラ 調合師・試験染要員



渡辺隆司氏



今治タオルの産地ブランド化以降、「白いタオル」がすっかり有名になったが、ジャカード織機を使った色とりどりのタオルは、昔から今治タオルの代名詞である。その色を調合するプロフェッショナルが、今回とり上げる渡辺隆司氏である。

渡辺氏の「色の再現性」に対して染色加工業界は大きな信頼を置いており、その技術は染料メーカーの（株）ヤスハラ的发展を長年にわたり支えてきた。

調合師も、今治のタオル生産に欠かせない技術者であり、分業における裾野の広さを物語っている。

わたなべ・たかし ☆ 1953年11月、愛媛県今治市衣干町生まれ。1966年3月今治市立立花小学校卒業後、同年4月今治市立立花中学校入学。1969年3月同校を卒業したのち4月に愛媛県立今治工業高等学校繊維化学科へ入学し、タオルづくりの基礎を学ぶ。1972年3月、染料メーカーの（株）ヤスハラに調合師・試験染要員として採用され入社。入社後3年ほど取引先を覚えるために配送業務を担当するが、その後調合師・試験染要員として先達^{せんぱつ}から指導を受けてキャリアを積む。入社して約半世紀、ヤスハラの強みである「Color Matching(色の調合・色の再現性)」を技術面から支え、いままも第一線で活動しながら後進の指導にあたる。

1. 幼少青年時代


昆虫採集の思い出

渡辺隆司氏は、1953年11月27日、今治市^{きぬぼし}衣干町にて米作農家の清氏とエツ子氏の間で長男として誕生した。父親は、米づくりの傍ら、時折建設業関連の仕事に就くこともあった。渡辺氏の下には6つ年の離れた妹・^{すみこ}純子氏がいる。そのため、幼かった頃は「一人っ子長男」で大切に育てられた。

のちの話になるが、渡辺氏は跡取り長男として両親から農地を受け継ぎ、本業の傍ら米づくりを長年にわたりつづけてきた。



衣干八幡大神社

渡辺氏が生まれ育った衣干町には、歴史ある神社が鎮座している。衣干八幡大神社（通称、衣干神社）である。愛媛県神社庁によると、衣干神社は1135（保延元）年に平安時代後期の武将であった^{かわのちかきよ}河野親清（越智親清）の命によって京都府八幡市の石清水八幡宮から勧請された26社のうちの1社である。その後、1373年9月28日に覚理法王（出家時の長慶天皇  の名前）が船に乗って松山へ向かう途中でこの地に立ち寄り、夜霧で濡れた衣を岩に干されたことから、衣干八幡宮と名称が改められた。衣干神社は、衣干町のシンボリックな存在であり、地域の人たちに親しまれている。

1960年4月、渡辺氏は、今治市立立花小学校に入学した。勉強はそこそこに、遊びにはしっかりと取り組んだ。とりわけ、昆虫採

集に夢中になった。虫の音が聞こえてくると、それは渡辺氏の昆虫採集のシーズン到来を告げる合図だった。衣干町をはじめ、渡辺氏が幼少時に過ごした場所は周り一帯を田んぼで囲まれ、多種多様の昆虫がそこかしこに生息していた。夏休みになると、決まって昆虫採集に没頭し、注射針や専用の薬品が同梱された標本専用キットを近くの店で購入し、採取した昆虫に細工を施して標本を作成した。キットが売っていないときは、街の薬局でホルマリン（ホルムアルデヒドの水溶液）を入手し、標本を手づくりした。ホルムアルデヒドは、1965年の「毒物及び劇物指定令」を受けて劇物に指定され、現在は大人でも簡単に手に入らないが、昔は一般の薬局でも販売しており、のんびりとした時代だった。

小学校時代をのびのびと過ごした渡辺氏は1966年4月に今治市立花中学校へ入学した。部活動など懸命に何かに打ち込むことはなかったが、中学3年生のときにぼんやりと将来について思いを巡らすようになった。「今治はタオルの街だし、男工になって仕事するのかな。そしたら専門に行った方がいいな」と考え、タオルづくりの基礎を学べる学校への進学を決めた。タオルに強い関心を抱いていたわけではない。巡り合わせのようなものである。そして、中学

校を卒業後、1969年4月に愛媛県立今治工業高等学校繊維化学科に入学した。

中学校の卒業式で印象に残っている言葉がある。それは、当時校長だった横田先生が卒業式の挨拶で述べた、「和して同ぜず」である。「他者と協調し助け合う

ことは大切だが、同時に自分の考えをしっかりと持つこと」を意味する人生訓であり、論語の「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」に由来する。横田先生のこの言葉は、ずいぶん大人になったいまでも心に残っている。



繊維化学科でタオルの基本を学ぶ

繊維化学科では、3年間をとおしてタオルづくりの基本を学んだ。その間、16歳で二輪車の免許を取得し、18歳で唐子浜にある今治自動車教習所に通って四輪自動車の免許を取得した。二輪車免許を早々に取得した理由は、「バイク通学」という渡辺氏の夢があったからであるが、学校が「バイク禁止」を決め、その夢は叶わなかった。しかし、二輪車と四輪車の免許取得は、高校卒業後の職場で大いに役立った。

「タオル漬け」の3年間を過ごし、いよいよ卒業後の進路を決める時期が近づいてきた。就職先の候補として、愛媛県染織試験場（現在の愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センター）、（一財）日本タオル検査協会、（株）安原商店（のちの（株）ヤスハラ）の3つがあった。そのうち安原商店は、父親の知人からの紹介であり、高校の先輩の就職先でもあり、また自宅から通える距離にあったことから、渡辺氏の第一志望であった。1960年代から今治では比較的賃金の高い首都圏へ職を求める若者が多くおり、繊維化学科の渡辺氏の同期は40名ほどいたが、そのほとんどが市外や県外、関西地方の企業に就職し、地元でタオル関係の仕事に就いたのは渡辺氏一人だけだった。

2. タオル業界に身を置く

3年ほどの下積みを経て調合師となる

渡辺氏は、1972年3月に調合師・試験染要員として安原商店に入社した。卒業式を2月に終え、翌月からの入社であった。渡辺氏が就職した1970年代初頭は、戦後のブロンウッズ体制のもとで

安定した経済成長を遂げてきた日本経済がひとつの節目を迎えた時期である。1973年には第一次石油危機（オイルショック、石油ショックとも呼ばれる）に直面し、日本経済に大きな打撃を与えたが、今治タオルへの影響はあまりなかった。

渡辺氏は、入社後すぐに調合師の仕事には就けず、もっぱら安原商店の取引先をまわる配送業務に従事した。会社の方針として調合師の技術を学ぶまえに、取引先の顔を覚えることが重視されたからである。本音では、「なんでこんなことせなあかんのや。わしは配達するために、この会社に入ったんじゃないぞ」とおもっていたが、あとになってその意味を理解した。

高校卒業前に取得した普通自動車免許が役に立ち、トヨタ製ハイラックスのピックアップトラック1トン車に荷物を乗せて今治市周辺地域をまわり、取引先を覚える毎日がしばらくつづいた。この荷物が曲者であった。当時、芒硝（硫酸ナトリウム）やソーダ灰（炭酸ナトリウム）など染色加工に使用する薬剤や油剤など、重いもので30kg～50kgくらいの袋物や樽物などをトラックに積み、取引先に到着すると、これらの荷物をただ下すだけでなく、取引先の倉庫に未使用のものがあれば、古いものが一番上になるように積み直しする必要があった。なぜなら、薬剤のなかには古くなると固まる性質のものがああり、取引先が古いものから順番に便利よく使えるように段取りをするのも安原商店の仕事だったからである。現在はパレットのうえに20kg～30kgくらいの薬剤が整然と収納され、リフトで積み下ろしするため、作業者の負担は随分軽くなっている。

そうして3年ほど過ぎたあたりから、調合師としての下積みがはじまった。安原商店には越智敏氏や別府道男氏など頼れる先輩たちがおり、渡辺氏は恵まれた環境のなかで調合師に必要なさまざまな技術を修得することができた。現場にコンピュータが導入される以前はすべてのプロセスを手作業でおこなっていた。染色加工業者から送られてくるサンプルをみながら、過去に積み上げられたデータを参照しながら色を調合するという、たいへん手間のかかる作業だ

った。

1980年代から1990年代になると、染料業界においてコンピュータ技術が広く利用されるようになった。その代表的なものがコンピュータ・カラー・マッチ（CCM）である。CCM開発の歴史は、1931年にクベルカ Kubelka とムンク Munk がその理論を提案したことに遡る。その後研究開発が徐々に進められ、日本では1965年に住友化学工業（株）が日本初のCCMを開発している（鈴鹿正和「最近の染料用コンピュータ・カラーマッチングの動向」*Japan Society of Colour Material, Journal of the Japan Society of Colour Material*, Vol.65, No.11, 1992年、700頁）。

安原商店では、1980年代後半にCCMや自動調液装置などが導入され、色合わせの精度が数段向上したと同時に、作業時間が短縮された。手作業ですべてのプロセスをおこなっていた時代に比べると、複雑な技術や難解な知識を必ずしも必要としなくなったが、最後の仕上げは人間の判断が入る。その理由は、気温や湿度、染色加工業者の晒し場のクセ（使用する原系や助剤の違い）などを加味しながら微調整をおこなうからである。



ラボの中には小さな実験室があり、微妙な調整はいまでも手作業でおこなわれている

23 歳で結婚し、身を固める

渡辺氏にとって仕事の励みとなる出来事が訪れた。それは、友人の紹介で上浮穴郡久万高原町出身のよしみ氏と出会い、1977年10月14日に入籍したことである。そして、4人の娘を授かった。いずれは男の子がほしいとおもっていたが、4人目も女の子だったため、男の子の誕生をここで諦めた。

女の子4人の誕生は、野球でいう「ファーボール（四球）」だとユーモアを込めて渡辺氏は言うが、妻と娘4人との生活は賑やかで穏やかなであった。子育てはよしみ氏に任せっきりだったが、渡辺氏はこれまで以上に仕事にとり組んだ。

現在、娘たちは、看護師と保育士として今治市内や県外で活躍している。そして、9人の孫たちにも恵まれ、いっそう賑やかになった。

（次号につづく）

